

俳優

荻谷 俊介さん

完璧がないから、常に挑戦

「あつ、『大都会』の弁慶だ」と懐かしく思われた方もいるだろう。現在も名脇役としてNHKドラマなどで活躍中の荻谷俊介さん。俳優業のかたわら考古学の分野でもその名を馳せている。自然豊かな土地に居を構え、自ら縄文土器も焼くというのだから、恐れ入る。俳優と考古学、二足のわらじを履かれるようになった経緯をつかかった。





PROFILE

【かりや しゅんすけ】1946年（昭和21年）、大分県日出町出身。東宝芸能学校演技科卒業後、『トラ・トラ・トラ!』（1970年、アメリカ映画）の助監督を経て、『さらば掟』（1971年、松竹）で映画俳優デビュー。石原プロモーションの刑事ドラマ『大都会』と『西部警察』で人気を博す。1984年に石原プロを退社後、独立し株式会社土舞台を創設。その後も、映画やテレビ、舞台などで活躍中。最近の出演作はNHK土曜ドラマ『芙蓉の人』。

2000年より日本考古学協会会員。著書に『まほろばの歌がきこえる』（H&I出版、1999年）、『土と役者と考古学』（山と溪谷社、2003年）、『苅谷俊介の考古学対談』（新日本出版、2005年）論文に『大塚初重先生喜寿記念』『石野博信先生古希記念』他がある。

——苅谷さんと言えば、昭和50年代に一世を風靡した石原プロモーションの大ヒットドラマ『大都会』や『西部警察』の刑事役の印象が強いですが、役者を目指された動機は何だったのですか。

もともと芝居が好きで役者になったわけじゃないんですよ、私の場合。要は、生活困窮からの脱却という経済的な理由でした。高校卒業後、九州から上京してサラリーマンをしていたのですが、実家に仕送りしてアルバイトを払うと、ほとんど手元に残らない。とてもじゃないけど暮らしていけない、ここから抜け出そうと思って、役者を目指すことにしました。役者は収入が多いんだらうなという単純な発想です。

役者になるには演技の基礎を身につけなければということで、芝居の学校に通いました。昼間働きながら通える夜間クラスの演技科だったのですが、日舞からバレエ、タッ

プ、声楽まで全部やらされる。そんなことやると思っていないからほとんどサボっていましたが、芝居自体はだんだん面白いと思うようになっていきました。

——どういうところが面白いと？

授業の時、皆の前でセリフを言うのが、最初はすごく照れくさかったんですよ。だけど、ここはこういう表現で動きはこうして……と先生のアドバイスを受けて、その通りやってみるとセリフが生きてくることを実感して、「おー、これは面白いな」と。それからですね。芝居が面白いと思うようになったのは。

——それで、役者の道に入っていけたと。

そう簡単にはいかなかったです。芸能学校を卒業したからと言って、役者の仕事なんて全くありませんから。何か映画の仕事に携わりたいという思いを抱きながら、アルバイトで食いつないでいました。

あるシャンソン歌手の鞆持ちのアルバイトをしている時、アメリカの戦争映画『トラ・トラ・トラ!』の関係者と知り合う機会がありました。その人に「俺は役者志望です!」と売り込んだところ、「役者はもういっぱいだから、何か他の仕事でもいいか?」と。それで、『トラ・トラ・トラ!』の制作スタッフとして採用されました。

「お前おもしろい顔をしとるのう。
よし、役者やってみろ」

——役者じゃなくてもよかったのですか。

とりあえずは何でもよかったんですよ。映画のことなら何でも知れたかったですから。

——実際の映画の現場はいかがでしたか。

面白かったですよ。それに20世紀フォックスの映画だから給料がすごかった。大卒の初任給が2万円の時代に、週給3万円以上ですからね。さらに宿代や食事代ももらえて、手に余るくらいでした。

制作サイドではいろいろあったようで日本側の監督が黒澤明監督から舩田利雄監督と深作欣二監督にかわったりしましたが、10人近くいる助監督の一人として私も映画制作に関わることができました。

——その後、役者への道はどのようにして開かれたのですか。

自分が担当していた撮影が終わり、舩田監督に挨拶に行った時、監督から「お前おもしろい顔をしとるのう。よし、役者やってみろ」と言わたのがきっかけでした。そこから舩田監督の映画に出演するようになりました。

——ということは、苅谷さんの役者デビュー作も舩田監督の作品ですか。

そうです。渡哲也さん主演の松竹映画『さらば掟』です。渡された台本の中に、自分の名前を見つけた時は感激しましたよ。



台本によつて

「今回はこのスタイルでいこう」などと考える面白さがあります。

生活自体は特に変わらなかったです。

——ファンが増えたとかは？

それはありましたね。ファンはすぐ増えました。事務所に置いてある自分の段ボールにファンレターがたくさん入っていたり、バレンタインデーのチョココレットが大量に届いたり、それは悪役の時とは全然違いました。やはり人気番組でしたから。

——それ以降、『西部警察』Ⅰ～Ⅲ、『はぐれ雲』など話題のドラマに次々に出演されるようになったわけですね。荻谷さんにとって、役者という仕事の面白さは何ですか。

台本によつて「今回はこのスタイルでいこう」などと考える面白さがあります。レギュラー出演の場合、その役の人物像は変えられないけれど、「この部分でこうやってみよう」とアドリブのセリフを言ってみたり、「アクションの最後には、このセリフを必ず言うてやろう」とか、自分の中で役をつくっていく面白さです。

——例えば？

『大都会』の時、城西署勤務の刑事役として、犯人を捕まえる前に立ち回りをするんですね。それで、アクションの最後に「俺は城西署の弁慶じゃーっ！」と決まり文句

——オーディションはなかったのですか。

なかったですね。悪役ですから、一番は「顔」ですよ。「お前悪い顔しとるから、悪役やれ」みたいなもんです。それからというものの、悪役路線でいくようになりました。

——石原プロのドラマに出られるようになったのは、いつですか。

渡さんとは『さらば掟』以来の付き合いでかわいがってもらいましたし、悪役として出演していた舩田監督の作品はスタッフが皆、石原プロでした。そんな付き合いから、石原プロに転がり込んだような形です。

石原プロでは何でもやりました。運転手もやれば、役者もやる。とにかく何かに関わっていたというのが、自分の中にありましたから。

——嬉しかったですか。

嬉しかったですね。『7人の刑事』にしても『大非常線』にしても、それまでのドラマでは刑事役と言えはみんな二枚目でしたから、はちゃめちゃな顔をした刑事の登場は視聴者にとって新鮮だったと思います。「いるいる、こんな顔の刑事」みたいな、リアルな刑事の顔だったんじゃないかな。

——悪役から刑事役になって、演技はどう変わりましたか。

一番変わったのは顔の表情です。犯人を捕まえるほうの役になると、物事を考えるような表情になります。本来の自分に戻ったなという感覚がありましたけどね。

——『大都会』の刑事役として出演するようになって、生活に変化はありましたか。

8000年前の人間がつくった土器のかけらが、 20世紀の俺の手の上にある。 この8000年という時の流れは一体何なんだ！

を言うんですけど、それは自分なりに役をイメージして出てきたセリフです。そのうち監督に「はい、いつもの」と言われるようになって、水戸黄門の印籠みたいに定番シーンになっていくんですけど、自分がつくったものを周りが認めていくところも、役者としての仕事の面白さかな。監督と相談して「じゃあ、それで行きましょう」とか、演技をつくっていく過程ですね。

——そのように役者として順調にキャリアを重ねられる一方、プライベートでは考古学にのめり込んでいかれたということですが、そもそも考古学に興味をもたれたきっかけは何だったのですか。

考古学との最初の出会いは高校生の時にさかのぼります。私の住んでいた町で遺跡の発掘調査が行われていて、地元の高校生たちは実習で土運びなど手伝いに行っていました。私自身は車で50分ほどかけ大分市内の高校まで通っていたため参加したことはなかったのですが、とにかく私は学校に行くのが嫌だった。それで、学校をサボっている時間をどうやって過ごそうかと友達と話しているうちに、友達が行ったことがあるという遺跡発掘に参加しようということになりました。

遺跡発掘をしていた大学生に「僕たち学校が休みなので参加させてもらえませんか」と言ったら、上の人に許可を取ってくれて「いいよ」と。「学校をサボっているとは言っても、映画を見ているわけでも、喫茶店に行っているわけでもない。ちゃんとした考

古学という現場に参加しているのだから、退学にはならないだろう」、そのくらいの軽い気持ちでした。

——そこではどんな作業をされたのですか。

土運びや土をふるいにかけてる作業などです。発掘調査では、まず、遺跡の有無を調べるための溝を掘り、次に、土層の堆積状況を調べるための印をつけていきます。その上で実測していくのですが、全部終わったところで、大学の先生から「ここはもう壁を壊していいよ」と言われました。それで、私が土層の壁を壊している時にポロッと土器片が出てきたんです。

その土器片をてのひらに載せてじつと見ていたら、先生が「それは8000年前の土器だよ」と教えてくれました。それを聞いて、「8000年前の人間がつくった土器のかけらが、20世紀の俺の手の上にある。この8000年という時の流れは一体何なんだ！」と思いました。不思議な感覚というか、ショックでしたね。

——そこから考古学の世界に足を踏み入れられたのですか。

いや、そうはならなかったですね。考古学をやってみたくて思ったことはありますけど、通っていた工業高校は卒業したら就職するのが当たり前でしたし、考古学のこととはそのまま忘れてしまいました。

——再び考古学に興味を持たれるようになったきっかけは、何だったのでしょうか。

『西部警察』を撮影していた頃、石原裕

次郎さん宅の新築工事があったて、その場所が「上神明遺跡」と呼ばれる弥生時代の終わりから古墳時代後期の遺跡でした。工事の前に遺跡発掘調査が始まって、私は撮影帰りに立ち寄っては、発掘された鍬先とかペンダントを見たりしていました。

だからと言って、すぐに何かを感じたわけではなかったのですが、ある時、突然「あつ、俺はこれをやりたいんだ」と思ったのです。「役者の仕事は好きだし、飯のタネだし、演技もやりたいんだけど、俺には生涯学習というか、学問の世界がないな」と。そこからですね、本格的に考古学をやるようになったのは。ちょうど33歳の時でした。

——当時、仕事のことで将来への不安や悩みを抱えていたとか？



考古学の道を突き進むきっかけとなった上神明遺跡との出会い

「これだけは自分のものにしたい」 という気持ち、ただそれだけです。

全くありません。本当におかしなものです。運命というか、そんなもんです。

——そこから、どのようにして考古学を学ばれたのですか。

考古学という学問は「土」がわからないと話にならないと思って、できるだけ発掘現場に足を運ぶようにしました。当初は撮影が休みの日や年末年始、夏休みなどを利用して見に行っていたんですけど、そうしているうちに「考古学をやるなら掘らなきゃダメだ」と感じるようになりました。

とは言っても、レギュラーを持っていると台本を同時に3冊とか4冊とか抱えているから、そんなに時間は取れません。毎日忙しかつたですから、このままでは発掘現場には行けないなど。「だったら石原プロを辞めるしかない」という結論に至りました。

——それは随分思い切った決断ですね。

自分の中でこれからの生活、役者としての将来、お世話になった渡さんや石原裕次郎さんのこと、いろいろ悩み抜いた上での決断でした。1年半くらいは考えましたね。

——石原プロを辞めるということは、安定した生活を捨てるということになりますよね。奥様は反対されませんでしたか。

反対はしなかったですけど、しぶしぶだったでしょうね。

——お子さんもいらつしゃって、まだこれからの生活があるのに、そこまでの決断をされたのはなぜでしょう。

自分が学びたいと思うことを学びたかった

のです。「これだけは自分のものにしたい」という気持ち、ただそれだけです。「役者はある程度やつたし、今後このまま役者としてやっていけるだろう」と思っていました。

——それ以降は、考古学に軸足をシフトされたのですか。

最初の頃は発掘調査中に役者の仕事でオフアーが来ても断ったりして、役者より考古学を優先させていました。「苦しくてもしようがない、麦飯食つてもしょうがない」と。「何はともあれ発掘現場に足を運んで覚えなければ」と無我夢中でした。

——発掘調査には、どのようなルートで参加されたのですか。

市町村の教育委員会です。「実習生のような形で発掘調査に参加したいのですが、いいでしょうか」と尋ねて、「いいですよ」と言われたところに行くという感じです。そこで作業員として土運びから始めて、質問しながら学んでいきました。

——本当に下っ端からですね。

そうですね。私より10歳くらい若い人が責任者といった現場で、一生懸命やりました。役者という肩書きは捨てちゃってね。

——顔の売れた役者がそんなことをして、好奇の目で見られませんでしたか。

それはありましたよ。「あんな、考古学をやっている役者」というのを売りにしたいのかい」とか。そこをぐっと堪えてでも、ここで学び取らなければという気持ちのほうが強かったです。



奈良県纏向遺跡には
23年以上通い詰めている

土層の分層や実測、図面や土器の接合などを覚えるまでに約5年かかりました。全く違う畑から飛び込んで基礎知識がないですし、年齢も年齢でしたから。私が初めて調査報告書を書いたのは40歳の時ですが、大学で考古学を学んだ人は20代で書きます。それを考えると、かなり遅かったですね。

——その調査報告書を書かれたのは、どこ

の遺跡だったのですか。

福島県にある仲ノ平古墳群です。遺跡が



数々の発掘現場で
責任者も務めてきた

発掘された場合、現状保存でそのまま残されるならいいのですが、たいていは土地利用のために取り壊されますから、調査報告書という形で記録保存します。仲ノ平古墳群も工業団地となる予定で、造成する前にどういふ遺跡があるのか調査報告書を作成しなければなりませんでした。

——それを一人で書かれたのですか。

調査報告書は言わば共同執筆で、複数の調査員で分担します。仲ノ平古墳群では、第13号墳まであるうち私は第9号墳を担当しました。担当者として、作業員さんに指示しながら発掘調査し、図面を引き、報告書を書いていく。各担当者が書いたものをまとめると、1冊の調査報告書が出来上がるというわけです。

——なるほど、そうだったんですね。でも、どう掘ればいいのか指示できるということは、その遺跡がどうなっているのかイメージできているということですよ。

それはそうです。「これは住居跡で、ここに柱があったらここに炉が出てくるな」とか、そういうものは見えています。土器片が出ていれば、だいたい何かわかるんですよ。「古墳前期の住居跡だったらかういふ形になっている」とか、目安をつけられます。

——そういう目安をつけられるようになるには、発掘現場での経験が大切だと。

関東の五領式土器と東北の塩釜式土器の並行関係はどうなっていて、その特徴はどうだとか、そういうことは自分で一生懸命勉

私は「もうこれでいい」という人生が嫌なんです。自分が納得のいく方向に向かつて、常に挑戦し続けていたい。

強するしかないですね。

例えば、槍先が出土しても鉄だからボロボロにさびていますよね。それを細かく観察して、この形だとだいたいの時期のものだとか目利きをしないといけない。だから、難しい。考古学というのは永遠に結論の出ない学問ですよ。

そこは芝居とよく似ていますね。芝居も絶対的に完璧なものではなくて、役者は芝居をしながら「これは違う。次はこうやってみよう」と考えながら前に進んでいく。考古学も同じで完璧はありません。「絶対こうだ!」というものはなくて、新しい発掘があると「これはそうだったのか」ということが見えてきて前に進んでいくんですよ。

——全く異なる二つの世界だけれど、荻谷さんにとっての魅力は同じだと?

そうですね。完璧じゃない、完全じゃないから、いつも挑戦していなければならぬという点で同じです。

——終わりなき挑戦ですね。

死ぬまで続くでしょうね。私は「もう、これでいい」という人生が嫌なんです。自分が納得のいく方向に向かつて、常に挑戦し続けていたい。そう思って生きてきましたか

ら。そうしているうちに、どこかで死ぬんでしょけど。

——そういう姿勢だからこそ、考古学にも惹かれたのかもしれませんが。これまでに、どれくらいの遺跡に関わられたのですか。

北海道から北部九州まで約30カ所です。作業員として行ったり、調査協力という形で参加したり、調査担当者として関わった全部ひくるめてそんなもんでしょう。

——先方から来てくださいと依頼されて、参加されるのですか。

いや、来てくださいじゃなくて「今ここを掘ってるけど、荻谷さん見に来ない?」とか電話が掛かってくるんです。それで、興味のある時代や遺跡だったら飛んでいきます。

——興味のある時代とは?

縄文時代の精神性にはすごく興味があります。彼らが持っていた世界観や物の考え方とか。縄文時代の遺跡や遺物を調査していると「すべての物には聖霊が宿る」という縄文人の考え方が見えてきます。すべての物に対して恐れを持つと同時に、感謝の気持ちを持って生活していたのだなど。

——そういうことが、遺跡や遺物から読み取れるのですか。

考古学について各地での
講演活動も行っている



祭礼の跡やストーンサークル、異形石器などを見ていると、何となくわかってきます。縄文の人たちの生活は基本的に狩猟採取ですよ。だから、恵みに対する感謝の気持ちは現代人以上に強いかもしれません。それに、祖先からの流れも大事にしています。そういう部分が見えてくるので、縄文時代は非常に興味深いですね。

——それらは現代人が忘れてしまったものかもしれませんね。

我々が忘れてしまったもの、見失ってしまったものは、あまりにも大きいですよ。忘れてしまったものは自然で、見失ってしまったものは人間の心です。自然なんて破壊し尽くしていますからね。未来のためには、学校で縄文時代をきちんと教えたほうがいいと思います。

——そう言われれば、私も縄文時代について学校で詳しく習った記憶はないですね。

ゆとり教育では、日本史が弥生時代からスタートしていたくらいですからね。最近や

縄文時代の1万2000年間、 人々は自然と共生する すばらしい文化を築いていた。

つと学校教育でも縄文時代が復活しましたが、私から言わせればまだまだです。

世界四大文明が確立した時代、日本では縄文人が自然と共生するすばらしい文化を築いていた。縄文時代の1万2000年間、人々は戦争をしていない。これは実にすごいことです。

——既に持続可能な社会ができていたとは、驚きです。

その文化を日本はもつと世界に誇るべきです。縄文時代の土器や土偶をヨーロッパの博物館で展示すると、大勢の人が見に来ます。すると、芸術的な視点、美術的な視線でそのすばらしさに驚きの声上がる。「日本という国では、4000年も前にこんなすごい物がつくられていたのか!」と。

経済は人口の増減や政治など時代によって変化しますが、文化というものは絶対的にその国にしかありません。文化の価値は絶対的に変わらないから強い。でも、皆がその価値に気づいていない。そこには教育が必要なんです。

——そうは言っても、考古学と聞くと何だか取っつきにくい感じがするのですが…。

確かに、形式論とか相違論とか聞くと難

しい印象を持つかもしれませんが、考古学の根底に流れているテーマは「人間」です。人間がいかんに生きてきたか、何をつくってきたか、ということですよ。だから、人間を中心に話をしていけば、考古学って結構面白いとわかってもらえると思いますよ。

大学で学んできた専門家から見れば、私の考古学は邪道かもしれない。ですが、道具一つをとつても、その背景には人間の精神活動がある。何のためにその道具をつくったのか、なぜ、その形状にしたのか。そこを考えれば民族の違いもわかってきます。それが今の考古学には不足しています。

——そういう意味では、異分野出身者の視点も重要ですね。

そうかもしれませんね。考古学は過去を知るだけの学問ではありません。未来を見すえた学問です。過去の世界観や価値観、過去の良いものを現代に引継ぎ張つてきて、現代、未来へとつなげていく学問。私は考古学をそのようにとらえています。

——興味深いお話を聞かせていただき、ありがとうございます。今後のご活躍も期待しています。

(インタビュアー／ライター 更田沙良)